●第2回「私と新聞」親子作文コンクール●

入賞作品紹介④

【小学生「親の部」優秀賞】

「未来への一冊」

福島市　星（ほし）　かよさん　35

今回、一冊のスクラップブックを用意した。震災以来、主に放射能の知識を得るために新聞記事から切り抜き保存している。

当初、各地で識者を招き講演会が開催されていたが、私は仕事の都合上、参加することができずにいた。本屋へ行けば、それらに関する本のコーナーもできているが、何冊もというわけにはいかない。それでも無知ではいけない。余計な不安が増すので、スクラップを始めた。知識以上に、安心できる材料を探している作業であることも確かだ。

先日、子どもが身に付けていた個人線量計の用紙が送られてきた。測定結果の数値に問題はなく、それも一緒に貼り付けて収めた。

こうして私なりの放射能の本が出来上がってくる。楽しい内容ではないが、私たちが記録として残していかなければならない出来事として、いずれ子どもに手渡さなければならない未来への一冊になるだろう。

【小学生「親の部」優秀賞】

「新聞と家族のつながり」

郡山市　扇（おうぎ）　厚子（あつこ）さん　46

「あ、じいちゃん、また赤線引いてるし」と、新聞を指さして娘がつぶやいた。赤のラインマーカーは、年老いた父が新聞を読む時の習慣なのだ。時間的な余裕と、きちょうめんな性格もあり、政治欄から生活情報まで記事全般のあちらこちらに線が引かれていた。

後から紙面をめくる者は思わず苦笑してしまうほどで、読みづらいと思う時もあった。

ところが震災後くらいからだろうか。気がつくと紙面から赤い線が消えていた。きれいな新聞を手にして満足なはずが、どこか物足りなく寂しさまで覚える自分に戸惑った。父が記憶にとどめた記事は、今思えば忙しい時にサッと読めて役に立ったし、話題を共有することでつながりを感じていたのかもしれない。

新聞は単に情報の提供だけではなく、日常のコミュニケーションスキルや生きる上でのガイド的役割も担っていると思う。読む集中力がなくなってきている父のためにも、今度は私が線を引こう。

掲載日:2012/03/21 面名:ワイド ページ:023　福島民報 :地方版 :朝刊